

研究開発二年次の報告

I 研究開発二年次の概要

1. 研究のねらい

『「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」—総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発—』

「個性を伸ばし社会的自立と将来への目的意識」を育てることが少子高齢化社会であり、成熟社会を迎えた中等教育の大きな課題である。その課題を「青年期のキャリア形成」と「高大の連携」と「総合的学習の発展」の3つのキーワードを統合し新しい併設型中高一貫カリキュラムを開発することで新しい学校づくりを考え、上記のテーマを設定した。「キャリア形成」を従前の進路観や職業観として捉えるのではない。「高校入試の重荷をはずした中学教育」と「大学との連携を生かした高校教育」とをつなぐもので、将来に向けての自己実現を目指す力の育成として捉え、中高を通して全ての教育活動の中で展開されていくべきであると考えたからである。総合的学習「総合人間科」の役割は大きい。同時に、「青年期のキャリア形成」の基盤としての「生きる力」と「心と身体教育」(ソーシャルライフ)を具体的に展開し、評価をしていくことになる。

2. 第2年次の課題

(1)大学との連携をいかして「併設型中高一貫カリキュラム」を実践

①「心と身体教育」を中心とした「ヒューマンプログラム」の実施

中学1・2年生 「ソーシャルライフ」
高校1年生 「ソーシャルライフ」

②選択プロジェクトの実施

中学2・3年生 異学年小クラス 9教科 10講座

③新教科群の実施

高校1年生 「心と身体科学」(前期)
「自然と科学」(後期)

(国際コミュニケーション学)「共生と平和の科学」は次年度高2で)

④総合的学習「総合人間科」の発展的展開 (キャリア形成と位置づける)

中学1年生から高校3年生まで

(2)学校生活全体において「併設型中高一貫カリキュラム」と生徒の諸活動との結びつきを図る

①「青年期のキャリア形成」との関連で進路指導を見直す。

②生活指導目標との関連で生活指導を見直す。

(3)生徒の変容を具体的に把握し成果と問題点を明らかにする。

(4)多様な学習方法を試みることで指導方法の改善を図る。

(5)「中等教育研究協議会」における公開授業と分科会においての検討をへて、第2年次の取り組みを評価し、第3年次に向けて研究成果のまとめの作業に着手する。

3. 第3年次のねらい

(1)「併設型中高一貫カリキュラム」全般の総括と評価

①高大の連携を生かした併設型中高一貫カリキュラムの系統性とその評価

②地域や名古屋大学の研究者、院生、留学生の参加による新教科群の評価

③高校2・3年生の名古屋大学の授業等への参加と成績評価のあり方

④「青年期のキャリア形成」との関連で進路指導を構築

⑤生徒の変容を具体的に把握し成果と問題点を明らかにする。

(2)「高大の連携」による新しい中高大一貫教育のあり方

①成熟社会における中等教育の課題と問題点をふまえて、新しい「中高大一貫教育のあり方」を提言

②「新しい中高大一貫教育のあり方」を報告書にまとめる。

4. 青年期の「キャリア」形成に資する「総合人間科」とヒューマンプログラム

総合的な学習「総合人間科」では、名古屋大学の研究室の先生方がスクールボランティアとして登録（大学との連携）し生徒一人ひとりの研究に協力するとともに、総合人間科の学習を個別に支援する体制がある。様々な人々との豊かな学びの体験は、中1（入口）の「生き方」から始まり、高3（出口）の「生き方」へとゆっくりと成長していくのである。総合的な学習「総合人間科」の学びの成果は、青年期の「キャリア」形成の観点から大きく評価することができる。

「キャリア形成」を従前の進路観や職業観として捉えるのではなく、将来に向けての自己実現を目指す力の育成として捉えるのである。そして、中高を通して全ての教育活動の中で展開されていくべきものでもある。だから中高6カ年の中で、生徒一人一人が明確な将来像を持てる発展的な総合的な学習「総合人間科」のもつ意味は大きい。

また、ヒューマンプログラムは、教科の学習や総合的な学習「総合人間科」の基礎となるものである。青年期の心理、発達的面を（生きる力・心と身体在教育として）教育学的見地から捉え直し、位置づけることが必要である。「ソーシャルライフ（人間関係構築スキル）」の授業を通して、自分自身の「心と身体」を客観的に見つめ直し自分を再発見することは、将来における自己実現をめざす力を基礎から育てることになる。

5. 中高の選択（「選択プロジェクト」と「4つの新教科群」）科目から「教科の再編」へ

個性の発達において選択の持つ意味は大きい。中学と高校の選択（「選択プロジェクト」と「4つの新教科群」）の違いは、個性の発達を段階的にとらえたものである。

中学の選択教科「選択プロジェクト」が9教科であるのに対して、高校の「4つの新教科群」は、複数教科によるクロスカリキュラムである。

これら新教科群の学習内容は、既存の教科のあり方に大きな影響を与えるもので、今後の「教科の再編」へと発展していくものである。

6. 大学との連携をいかして「中等教育の新しいあり方」を考える

今後の社会のあり方を考えると中等教育において、生徒自身が自己発見するとともに豊かなセルフイメージや職業観を獲得することはますます必要となる。その育成のためには、大学との連携をいかして「中等教育の新しいあり方」を考えていくことや実践を積み重ねていくことが重要である。今後の「中等教育の新しいあり方」として「大学との連携による中高大の一貫教育」は、多くの可能性をもつものである。

（文責：斉藤真子）

II 研究開発の経緯

1. 4. 9 第1回校内研究委員会
校内研究体制の提案検討 1
4. 16 第2回校内研究委員会
校内研究体制の提案検討 2
4. 23 第3回校内研究委員会
研究協議会について
5. 7 第4回校内研究委員会
研究協議会の持ち方について 1
5. 14 第5回校内研究委員会
研究協議会の持ち方について 2
5. 21 第6回校内研究委員会
併設型中高一貫カリキュラムのシラバ

- ス作りに関して
5. 24 平成13年度研究開発学校連絡協議会（オリンピック記念公園）
斉藤 山田 出席
5. 28 第7回校内研究委員会
併設型中高一貫カリキュラムのシラバ
ス作りに関して 2
6. 6 第1回合同研究委員会
研究開発学校第二年次の研究概要について
- 第8回校内研究委員会
6. 11 第9回校内研究委員会